

『帛書周易』の卦序構成における「象」と「数」

辛 賢

一 問題提起

『馬王堆漢墓帛書周易』が発見されて以来、その研究の中で注目された問題の一つに「六十四卦」の排列次序をめぐる問題があった。すなわち、帛書本の『周易』（以下『帛書周易』）は、通行本『周易』（以下『周易』）の六十四卦とは全く異なった排列をなしていたのだが、その排列の意義をめぐってさまざまな議論が行われてきたのである。『帛書周易』の卦序が『周易』のそれよりも古いのか、⁽¹⁾それとも系統が異なるものなのか、⁽²⁾あるいは漢易との関連はいかなるものなのか等々である。しかし現在に至るまでそれらの意見は必ずしも一致を見ている訳ではない。本稿においては、そうした問題の検討への基礎作業として、『帛書周易』の六十四卦排列方式の原則を明らかにし、その排列次序の持つ意味について検討したいと思う。

二 『帛書周易』と『周易』の六十四卦

通行本の『周易』六十四卦経文が上・下経に分かれ、上経は「乾」「坤」から「坎」「離」まで、下経は「咸」「恒」から「既濟」「未濟」までとなっているのに対し、帛書本は六十四卦が上・下に分かれず、「鍵（乾）」卦に始まって六十四番目の「益」卦まで、すべてが一篇の中に収められている。⁽⁴⁾

△表1▽は、『帛書周易』の卦序に順番をつけ、それに該当する通行本の六十四卦とその順番を当てはめたものである。

この表から見ても明らかだが、『帛書周易』と通行本『周易』の卦序は全く違っている。帛書本の卦序においてまず注目すべきは、乾卦と坤卦を中心に全体六十四卦がちょうど二分されている点である。次に注目すべきは、「乾」「坤」を含めて先天方位の八卦に当たる、1鍵（乾）・9根（艮）・

＜表1＞ 帛書と通行本の卦序対照表

帛書卦序	通行本卦序	帛書卦序	通行本卦序
1 鍵	1 乾	33 川	2 坤
2 婦	12 否	34 柰	11 泰
3 掾	33 遯	35 嗽	15 謙
4 礼	10 履	36 林	19 臨
5 訟	6 訟	37 師	7 師
6 同人	13 同人	38 明夷	36 明夷
7 无孟	25 无妄	39 復	24 復
8 狗	44 姤	40 登	46 升
9 根	52 艮	41 奪	58 兌
10 泰蓄	26 大蓄	42 夫	43 夫
11 剝	23 剝	43 卒	45 萃
12 損	41 損	44 欽	31 咸
13 蒙	4 蒙	45 困	47 困
14 蘖	22 賁	46 勒	49 革
15 頤	27 頤	47 隋	17 隨
16 簡	18 蠱	48 泰過	28 大過
17 習贛	29 坎	49 羅	30 離
18 禰	5 需	50 大有	14 大有
19 比	8 比	51 潛	35 晋
20 蹇	39 蹇	52 旅	56 施
21 節	60 節	53 乖	38 睽
22 既濟	63 既濟	54 未濟	64 未濟
23 屯	3 屯	55 筮盍	21 噬嗑
24 井	48 井	56 鼎	50 鼎
25 辰	51 震	57 筭	57 巽
26 泰壯	34 大壯	58 小菽	9 小畜
27 餘	16 豫	59 觀	20 觀
28 少過	62 小過	60 漸	53 漸
29 婦妹	54 婦妹	61 中復	61 中孚
30 解	40 解	62 渙	59 渙
31 豐	55 豐	63 家人	37 家人
32 恒	32 恒	64 益	42 益

17 習贛(坎)・25 辰(震)・33 川(坤)・41 奪(兌)・49 羅(離)・57 筭(巽)が、それぞれ六十四卦の八分の一に当たる位置にある点である。これらのことは何を意味するのであろうか。

ところで、従来通行本の六十四卦の排列原則については、孔穎達の「序卦伝」題疏がもっとも重要な解釈であった。それは「今驗六十四卦、一二相耦、非覆即變。覆者表

裏視之、遂成兩卦、屯蒙、需訟、師比之類是也、變者、反覆唯成一卦、則變以對之、乾坤、坎離、大過頤、中孚小過之類是也」と、象数易学の中で行われた「覆」「變」の方法によって二つずつペアを組む排列として示されていた(△表2▽参照)。

孔穎達の言う「覆」と「變」の排列方法とは、例えば、△表2▽の11番・12番と泰卦と否卦の場合、泰卦(䷊)の

＜表2＞ 通行本の排列方式

注：□は対卦を示す。

【上経三十卦】（対卦六・反卦十二）				【下経三十四卦】（対卦二・反卦十六）			
☰	(1) 乾	(為天)	☷	☰	(31) 咸	(沢山)	☷
☷	(2) 坤	(為地)	☰	☷	(33) 遯	(天山)	☷
☳	(3) 屯	(水雷)	☵	☳	(35) 益	(火地)	☵
☵	(4) 蒙	(水天)	☲	☵	(37) 家人	(風火)	☲
☲	(5) 需	(水天)	☲	☲	(39) 蹇	(水山)	☲
☱	(6) 比	(水地)	☱	☱	(41) 損	(山沢)	☱
☱	(7) 師	(地水)	☱	☱	(43) 夬	(沢天)	☱
☴	(8) 比	(水地)	☴	☴	(45) 萃	(沢地)	☴
☴	(9) 小畜	(風天)	☴	☴	(47) 困	(沢水)	☴
☶	(10) 履	(天火)	☶	☶	(49) 革	(沢火)	☶
☶	(11) 泰	(地天)	☶	☶	(51) 震	(為雷)	☶
☷	(12) 否	(天火)	☷	☷	(53) 漸	(風山)	☷
☳	(13) 同人	(天火)	☳	☳	(55) 豐	(雷火)	☳
☳	(14) 大有	(火天)	☳	☳	(57) 睽	(為風)	☳
☵	(15) 謙	(地山)	☵	☵	(59) 渙	(風水)	☵
☵	(16) 豫	(地山)	☵	☵	(61) 中孚	(風沢)	☵
☱	(17) 隨	(沢雷)	☱	☱	(62) 小過	(雷山)	☱
☱	(18) 蠱	(風火)	☱	☱	(63) 既濟	(水火)	☱
☱	(19) 臨	(地沢)	☱	☱			
☱	(20) 觀	(風火)	☱	☱			
☱	(21) 噬嗑	(火雷)	☱	☱			
☱	(22) 賁	(山火)	☱	☱			
☱	(23) 剝	(地山)	☱	☱			
☱	(24) 復	(山火)	☱	☱			
☱	(25) 无妄	(天雷)	☱	☱			
☱	(26) 大畜	(山天)	☱	☱			
☱	(27) 頤	(山雷)	☱	☱			
☱	(28) 大過	(沢風)	☱	☱			
☱	(29) 習坎	(為水)	☱	☱			
☱	(30) 離	(為火)	☱	☱			

六爻を逆さまにすると、否卦(䷋)の象を得る。またその他にも「3屯䷂、䷌4蒙」、『19臨䷒、20觀䷓』、『45萃䷬、46升䷭』などもやはり覆法によって組まれたものである。覆法によるものは、乾、坤、頤、大過、坎、離、中孚、小過の八卦を除く五十六卦二十八組である。そして残りの八卦は、例えば1番・2番の乾卦(䷀)と坤卦(䷁)のように六爻の陰陽がすべて反対に転じて得られるものであり、これを「変」の方法という。『頤䷚、大過䷛』、『習坎䷜、離䷝』、『中孚䷼、小過䷽』も各々「変」によってペアを組むのである。孔穎達の言う「覆」と「変」の方法は以上のことを意味し、通行本の六十四卦はこの二つの方式によって組み込まれ、排列されている。

ところで、通行本『周易』の上・下経は上経三十卦、下経三十四卦と

卦数が等しくない。この卦数の不一致について孔穎達は『乾鑿度』の孔子の言「陽三陰四、位の正なり」に従って「夫れ陽の道は純にして奇なり。故に上篇三十なるは陽に象る所以なり。陰の道は不純にして偶なり。故に下篇三十四なるは陰に法る所以なり」(『周易正義』「序」第五論、分上下二篇)と解している。⁽⁶⁾だが、これは牽強の嫌いがあるとされてきた。⁽⁷⁾また朱子は「其の簡佚、重大なるが故に分かちて上下兩篇と為す」(『周易本義』上経第一)というのみで、上下経の形式やその卦数の等しくない問題は根本的には明らかにしなかった。しかし、この問題は元の胡一桂に至り解決された。⁽⁸⁾すなわち、「覆」によって組まれたペアを一つの反卦と見なし、また「変」によって対をなす卦を対卦と見なしたのである(ただ、反卦のように対卦はペアを基準にして数えない)。すると、上経には十二の反卦と六つの対卦が得られ、合計十八卦となる。また下経においても十六の反卦と二つの対卦が得られる。上・下経の卦数が合計十八卦として一致することになるのである(八表2/参照)。すなわち、「反卦」と「対卦」とを以てすれば上下経の卦数は等しくなると言えるのである。

さて、胡一桂の言うように上・下経の卦数は反卦と対卦の概念を用いれば一致することにはなるが、しかし問題を

深めてみると、なぜ上・下経の反卦と対卦の数は一致していないのか、またなぜ通行本『周易』は上・下の二篇に分かれたのかについては依然として疑問が残るのである。そして、実は、こうした問題点は、そのまま『帛書周易』にもつながるものでもあった。従来、通行本の上・下篇の形式については、漢朝の人が改編したものであらうとし、「非覆則変」の排列方法は記憶のための便宜から出たものに過ぎず、実際に通行本の卦序は必然的な意味を含むものではないとされてきた。⁽⁹⁾それと同様に『帛書周易』の六十四卦排列も、何らの有機的連関性もなく、筮人が実用のために、深い理解を求めずに、当時通行の八卦次序を参考にして機械的に融通のきかない形式を作り出したとされ、易学上の微言奥義は考慮していないとされてきた。⁽¹⁰⁾すなわち通行本も帛書本もその卦序が示す根本的な理由についてはいわず不明の状態とされてきたのである。

しかし、このような『周易』と『帛書周易』の卦序の検討に当たって、実はいずれも整合的な排列を為すことを明らかにする手がかりが、明の来知徳の『周易集註』⁽¹¹⁾に示されていた。来知徳は『周易』の上・下経の分類について次のように述べている。

上経は陽爻八十六陰爻九十四にして、陰、陽より多き

は凡そ八なり。下経は陽爻一百有六、陰爻九十有八にして、陽、陰より多きも亦た八なり。上経の陰、陽より多きもの、下経の陽、陰より多きもの皆同じく八なり。是れ卦爻の陰陽、均平なり。

(来知徳「上下経篇義」『周易集註』)

すなわち、通行本『周易』の上・下篇について、陽爻と陰爻の数を数えると、その陽・陰爻の数の差が上・下一致しているというのである。つまり、上経の「乾」から「離」に至る三十卦において陽爻と陰爻の数を数えると、各々陽八十六爻と陰九十四爻であり、上経においては陰爻の方が八爻多い。また、下経において同じく各々爻数を数えると、上経の陽・陰の爻数が入替わって陽爻九十四爻、陰爻八十六爻であり、陽爻が八爻多く配当され、その差もまた上経と一致する。これをさらに上述した反爻と対卦の概念を以て数えると、その差は上・下経同じく「四」に一致する。⁽¹³⁾このことは明らかに通行本六十四卦が「非覆即変」によって「象」を取り、さらに陰爻陽爻の厳しい「数」的排列をなす「象数の易」に基づいたものであることを示している。まさに来知徳の言うように「上下経の篇義、卦爻其の精なるは此に至るなり。孔子の贊、其の至精至変至神なるは厥^それ由る有るなり」の如く通行本六十四卦の排列は

整合的な工夫から作られたもののなのである。

来知徳は隆慶四年（一五七〇年）より萬歴二十六年（一五九八年）に至る二十九年間に渡ってこの『周易集註』を著述したが、その説はまさに「専ら繫辭の中の錯綜せるを取りて、以て易象を論じ、而して卦を雜えて之を治む」（『四庫提要』『周易集註』）と、「象数」による卦爻を用いたのであった。来知徳自身もその「序」に「王弼象を掃して自り以後、易を註するの諸儒皆、象、其の伝を失うを以て、其の象を言わず。止だ其の理を言うのみ。而して易中の取象の旨、遂に後世に塵埋せらる」とし、さらに「（諸儒）均しく其の象を知らず。文王の卦を序うを知らず。孔子の卦を雜えるを知らず。後儒の卦變の非を知らず。此において四者の既に不知なるは、則ち易、其の門を得ずして入るなり。其の門を得ずして入れば則ち其の註疏の言う所の者は乃ち門外の粗浅にして、門内の奥妙に非ず」として、王弼以来の「義理」に偏った諸儒の説を厳しく批判するのである。ともかく、来知徳はこれまで明らかにされていなかった通行本上・下経の六十四卦に包摂されていた卦爻の意味を見事に解明したと言えよう。

さて、筆者はこの来知徳の方法に『帛書周易』の六十四卦の意味を解明する手がかりの一つを得ることができると

＜表3＞ 『帛書周易』六十四卦排列方式

									「変」による対応		
	乾☰	艮☶	坎☵	震☳	坤☷	兌☱	離☲	巽☴			
	1 ䷀鍵	9 ䷌根	17 ䷌習頤	25 ䷌辰	33 ䷌川	41 ䷌奪	49 ䷌羅	57 ䷌辨			
乾☰	↑	10 ䷌泰畜	18 ䷌福	26 ䷌泰壯	34 ䷌泰	42 ䷌夬	50 ䷌大有	58 ䷌小畜	「変」		
坤☷	2 ䷁婦	11 ䷌剝	19 ䷌比	27 ䷌餘	↑	43 ䷌卒	51 ䷌晉	59 ䷌觀			
艮☶	3 ䷌掾	↑	20 ䷌蹇	28 ䷌少過	35 ䷌嗽	44 ䷌欽	52 ䷌旅	60 ䷌漸	「変」		
兌☱	4 ䷌礼	12 ䷌損	21 ䷌節	29 ䷌婦妹	36 ䷌林	↑	53 ䷌乖	61 ䷌中復			
坎☵	5 ䷌訟	13 ䷌蒙	↑	30 ䷌解	37 ䷌師	45 ䷌困	54 ䷌未濟	62 ䷌渙	「変」		
離☲	6 ䷌同人	14 ䷌噬	22 ䷌既濟	31 ䷌豐	38 ䷌明夷	46 ䷌勒	↑	63 ䷌家人			
震☳	7 ䷌无孟	15 ䷌頤	23 ䷌屯	↑	39 ䷌復	47 ䷌隋	55 ䷌噬盍	64 ䷌益	「変」		
巽☴	8 ䷌狗	16 ䷌箇	24 ䷌井	32 ䷌恒	40 ䷌登	48 ䷌泰過	56 ䷌鼎	↑			
第一段	36/12 —24多	20/28 --8多	20/28 --8多	20/28 --8多	12/36 --24多	28/20 —8多	28/20 —8多	28/20 —8多	(陽/陰)		
第二段	56/40 乾 —16多		40/56 坎 --16多		40/56 坤 --16多		56/40 離 —16多				
第三段	96/96 乾 ±0				96/96 坤 ±0						
第四段	192/192 易 ±0										

考える。すなわち、それは卦爻を用いて陽爻と陰爻の数を比べる方法である。まず△表3▽に『帛書周易』の六十四卦の排列を示そう。⁽¹⁵⁾

△表3▽ではまず横方向に八卦を乾・艮・坎・震・坤・兌・離・巽と排列する。これを上卦とする。次にその各上卦に対して縦方向に乾・坤・艮・兌・坎・離・震・巽と排列して下卦とする。そしてこの上・下八卦を重ねて交錯する地点に順番をつけて行く。ただし、その重なる上卦と下卦が同卦の場合は、各グループの先頭個所に引き上げる(↑で印した)。すると、1 鍵(乾)・9 根(艮)・17 習贛(坎)・25 辰(震)・33 川(坤)・41 奪(兌)・49 羅(離)・57 筭(巽)が各のグループの先頭に引き上げられる。そしてその順序は上卦と同じになる

この『帛書周易』の排列方式については、従来三爻からなる八卦を組み合わせて八八、六十四卦ができるという重卦の思想を直接六十四卦の排列方法に反映させているとする重卦説や、また上卦八卦の次序の前四卦が陽卦、後四卦が陰卦となっており、下卦八卦の次序が前四陽卦と後四陰卦とを交錯させたものとなっていることから、陰陽対立交錯の思想も反映していることなどが論じられてきた。⁽¹⁶⁾

しかし、これらは重卦の方法や陰陽思想を示すに止ま

り、根本的に『帛書周易』卦序の意味を説明するものではないと思われる。そこで筆者は、上述した来知徳の「上下経篇義」に示された手がかりをもとにその意義を探って見たいと思う。

まず、『帛書周易』卦序の排列方式は、上・下の八卦を重ねたものであり、その内の上下同卦となるものを先頭に引き上げた結果、並ぶことになる八つの卦を中心として八個の縦方向のグループが成立する。そこで△表3▽の下段に示したように、この八卦のグループのそれぞれの卦の陰陽の爻数を数える。これを第一段とする。この第一段において各グループの陽爻陰爻の間に生じる爻数の差は、乾・坤グループでは「36/12」「12/36」と、「24」の差を数えるが、残りの艮・坎・震・兌・離・巽のグループでは「20/28」「28/20」と「8」差で一致していることが分かる。これを第二段のように乾・坎・坤・離の四つグループに括ると、「56/40」「40/56」といずれもその差は「16」となる。そしてさらにこれを括って第三段のごとく乾坤両卦に代表させると、ともに陰・陽爻の偏りのないゼロの状態となる。最後にこれらをさらに括り上げると、三百八十四爻六十四卦の「易」全体が成立することになる。

一方、これまでの縦のグループに対して、横方向にグル

ープを組んでみる。つまり、先頭に引き上げられた卦を本来の交差する折り目に戻し、横方向に数える。すると、縦のものと同じような下卦の新しい八つの卦グループが得られる訳である。例えば、「1乾・10泰畜・18福・26泰壮・34泰・42夬・50大有・58小畜」が下卦の乾グループに属することとなる。そして同じような仕方でも交を数えると、縦と同様の陽・陰の交数となり、その差も同様になるのである。このような結果は何を意味するのであろうか。注目すべきは次の二点である。

まず、八卦グループで得られた陽・陰の交数の差を四段に分けて括った結果、四正卦として挙げられる乾・坤・坎・離の第二段において前段の八卦で生じていた陰陽交の差が等しくなり、天と地を象る乾・坤の第二段に至って「16」の交差は陰陽の偏りのないゼロの状態となる、ということである。もう一つは、縦と横における陽・陰の交数およびその差が一致するということである。以上のことは、「一陰一陽、之を内にし、之を外にし、之を横にし、之を縦にし、之を順にし、之を逆にすること、易に非ざるは莫し」(『周易集註原序』『周易集註』)という来知徳の語のように、「帛書周易」の六十四卦は縦と横の交数を一致させた精密な「数的排列」をはかったものであるということを示して

いると言えよう。すなわち、『帛書周易』六十四卦の卦序は、こうした「数」的規律によって成立していると言えるのである。

以上、「数」について検討してきたが、次に『帛書周易』の「象」について検討してみたいと思う

さきに、「二相耦、非覆即変」という孔穎達の語により通行本の六十四卦が「覆」と「変」の二つの方法で排列されていると見たが、一方、これに対して『帛書周易』の排列は専ら「変」の方法に基づいて卦象を構成しているのである。

△表3▽をもう一度見てみよう。例えば、まず上卦の「乾」のグループに属する八つの卦をもつて各々反対の交に変えて見る。つまり「変」法を行うのである。そしてそれによってそれぞれ卦象を取ると、その得られた卦象はすべて上卦の「坤」のグループに属する。すなわち、「1」→「8」の乾グループ八卦を「変」ずると、「1乾」→33坤「2婦」→34泰「3豫」→36林「4礼」→35噬「5訟」→38明夷「6同人」→37師「7无孟」→40登「8狗」→39復」のごとく、「33」→「40」の坤グループの卦象と一致するのである。上卦のグループ全体にこのような「変」を行ってみると、「艮」→「兌」、

「坎」↕「離」、「震」↕「巽」というグループの対が成立する。さらに今度は下卦グループを中心に横方向に考えて見る。すると、上卦グループの場合と同じく所属の卦がある決まったグループの卦象と対（「二三相耦」）をなしているのである。

このように『帛書周易』は六十四卦全体の縦・横に渡って、「変」の方式による「象」的規律をも包摂しているのである。すなわち『帛書周易』六十四卦の構成は、まさに「数」と「象」との二元的な、いわば立体的システムとして構築されていると言えるのである。

従来の研究では、通行本と帛書本との間ではその六十四卦の排列方式が全く関係のない異質のものであるとされてきた。つまり、従来、帛書本には「二三相耦、非覆即変」の跡が全くないとされ、重卦説のみが繰り返して強調されてきた。しかし、帛書本では「覆」の方法は用いられてないものの、「変」法による「二三相耦」の対は備えていた。そして「変」法に基づけば、六十四卦全体は漏れなくペアを組むのは必然である。通行本の六十四卦が一貫した対を成していない理由は、「覆」法を用いたが故に卦の内外の形が同じである乾☰・坤☷・頤☶・大過☱・坎☵・離☲・中孚☴・小過☽は漏れてしまったからであり、これらにつ

いては「変」という別の方法に頼るしかなかったのである。まさに孔穎達が「二三相耦するは、覆に非ざれば即ち変なり」と言っているように通行本の排列の基本原則は「覆」を主とし「変」で補ったものであった。とすると、通行本はなぜわざわざ切れの悪い「覆」を主要な方式として用いたのかという疑問が自然と生じる。「覆」と「変」は呉の虞翻が易の卦爻辞を解するに用いた「覆象」「旁通」に類似するものであるが、漢以後、易を解する者は皆覆象をほとんど用いていないと言われる⁽¹⁾。またその用い方がどのようなであったかなどについても今のところ分らない。ただ流派あるいは地域別に主とする卦象を取る方式が異なっていた可能性もあり、または「覆」「変」の方法の間に段階的性質が存在した可能性もあり得る。今のところ通行本が「覆」を採用した根本的理由は不明とするしかないであろう。

以上、通行本と帛書本の六十四卦排列を対照したが、六十四卦全体の経緯において帛書本には「象」「数」的性格は明確であり、また「象数」による精密な規律を成していた。このような帛書本の卦序の規律は、実は漢代に展開される象数易の脈絡の先頭に立っているものではないだろうか。そしてそのことを示唆するのが、京房の八宮世応図に表れる厳格な象数的規律である。

〈表4〉 八宮世応図

旁通卦

本宮	1 乾 ☰	9 震 ☳	17 坎 ☵	25 艮 ☶	33 坤 ☷	41 巽 ☴	49 離 ☲	57 兌 ☱
一世	2 姤 ☴	10 豫 ☱	18 節 ☵	26 賁 ☶	34 復 ☱	42 小畜 ☴	50 旅 ☱	58 困 ☱
二世	3 遯 ☶	11 解 ☱	19 屯 ☵	27 大畜 ☶	35 臨 ☱	43 家人 ☵	51 鼎 ☱	59 萃 ☱
三世	4 否 ☷	12 恒 ☱	20 既濟 ☵	28 損 ☶	36 泰 ☱	44 益 ☱	52 未濟 ☵	60 咸 ☱
四世	5 觀 ☱	13 升 ☱	21 革 ☱	29 睽 ☱	37 大壯 ☱	45 无妄 ☱	53 蒙 ☱	61 蹇 ☱
五世	6 剝 ☶	14 井 ☱	22 豐 ☱	30 履 ☱	38 夬 ☱	46 噬嗑 ☲	54 渙 ☱	62 謙 ☱
遊魂	7 晉 ☱	15 大過 ☱	23 明夷 ☱	31 中孚 ☱	39 需 ☱	47 頤 ☱	55 訟 ☱	63 小過 ☱
歸魂	8 大有 ☱	16 隨 ☱	24 節 ☵	32 漸 ☱	40 比 ☱	48 蠱 ☱	56 同人 ☱	64 歸妹 ☱
第一段	28/20 一 8 多	20/28 -- 8 多	20/28 -- 8 多	28/20 一 8 多	20/28 -- 8 多	28/20 一 8 多	28/20 一 8 多	20/28 -- 8 多
第二段	48/48 乾 ± 0		48/48 坎 ± 0		48/48 坤 ± 0		48/48 離 ± 0	
第三段	96/96 乾 ± 0				96/96 坤 ± 0			
第四段	192/192 易 ± 0							

三 京房易との関連

『帛書周易』卦序をめぐる議論においては、従来、京房易との関連、特に八宮世応図と類似する関係が指摘されてきた。⁽¹⁸⁾それは主に八宮世応図における「宮」の概念を『帛書周易』の八卦グループに対応させ、世応図における「本宮」と『帛書周易』の「上卦」との排列が「四陽四陰」あるいは「四陰四陽」という順序に従って卦の排列がなされているという点に両者の共通性が求められてきた。そこで筆者は既に『帛書周易』の卦序の検討の中で行ったことと同じような方法を世応図について試みることにする。

△表4▽は『京氏易伝』の中に序次されている六十四卦を表にしたものであるが、その基本構造を見ると、八宮（八純卦）を中心に六十四卦が生成するものである。その生成する卦序は各宮において、一世より五世に至るまで一爻ずつ累変して「遊魂」「帰魂」に至る。「遊魂」は五世に当たる卦の第四爻をもう一度変じたものであり、この「遊魂」の内卦を陰陽逆にしたのが「帰魂」である。⁽²⁰⁾

京房の説く世応説は以上の構造をもつものであるが、これに來知徳の行った方法をもう一度導入して見よう。すると、△表4▽で示されているように八宮を中心とする縦方

向に陽／陰の爻を数えると、まず第一段において「20／28」あるいは「28／20」となり、爻数の差は同じく「8」となる。『帛書周易』の場合では乾・坤グループによって一致できなかったものが、この世応図ではこの段階で見事に一致しているのである。この第一段で一致した爻数の差が、次の第二段以降第四段に至るまで、「±0」となるのは当然の結果であろう。次に横方向に向かって爻を数えてみると、その結果は既に第一段において陽／陰の爻数はゼロ（±0）となるのである。

ところが、『帛書周易』の検討においては縦・横方向において同様の数差を示していた。これに対して、世応図では両方における陽陰の交差は相違している。その理由は、『帛書周易』の場合、上・下の八卦を重ねた重卦方式に基本を置きつつ縦・横の爻の数を一致するように図ったものであった。ところが本格的な象数易の展開に至ると、陽／陰の交差の数値を最小化することに意が注がれ、その結果を示すものがこの世応図であると思われる。交差を最小化するために最も有効な方法が陰陽を逆にする「変」である。世応図をみると、ある宮を中心として生成する八卦は、横方向の別の八卦グループのどれかに対応する。例えば、乾宮の「1」より「8」に至る八卦は、そのまま坤宮

の「33」より「40」に至る八卦に対応し、それぞれ旁通卦（『「変」』を為す。すると、横方向における陽／陰の交差は必然的に「ゼロ」となる訳である。この世応図を『帛書周易』の卦序と対照して見ると、世応図の方がより陽／陰交数における整合的なシステムを為していると言えよう。

以上見てきたとおり、『帛書周易』と世応図とはともにその根底に「変」による旁通卦が組み込まれていた。前漢象数易においては、世応図は「象数的排列」を最も精密に極めたものと考えられている。そして世応図に比べると、『帛書周易』のシステムは若干素朴なものであった。そうして見ると、『帛書周易』の卦序はその象数易の展開の先蹤にあるものと見てよいと見られるのである。

四 結語

以上、本稿では『帛書周易』の経文六十四卦の次序に表れる原則と特徴について検討してみた。まず、その六十四卦全体のシステムについて明の来知徳の『周易集註』に示された方法を用いて検討してみた結果、各グループの卦交における「象」と「数」には二元的な構造が存在していることが明らかになった。更に通行本の卦序と対照してみた結果、通行本よりも、むしろ『帛書周易』の方が厳しい規

律性をもっていることが明らかとなった。このような『帛書周易』の規律的な「象」と「数」の排列は、前漢の象数易に至ってさらにその整合性を強めていく。このことを裏付けるものとして、京房の八宮世応図を検討したが、それは『帛書周易』よりもさらに精密で明快な排列を形成しており、その六十四卦全体のシステムは極めて整合的であった。かくして結論的に言うと、『帛書周易』の六十四卦は通行本『周易』のそれとは単に排列が違うだけではなく、その根底には以後強まっていく象数の傾向を含んでおり、さらにそれは前漢象数易の展開の前兆を表すものと言い得るものだったのである。

注

(1) 『帛書周易』の卦序をより古いものとする論文は、樓宇烈「易卦爻象原始」《北京大学学报》一九八六年第一期（一九八一年一月）、後に《中国—社会と文化》第二号の中で日本語訳された（馬淵昌也訳）。また周立升「帛《易》六十四卦趣議」《文史哲》一九八六年第四期（一九八六年七月）などがある。これに対して帛書本の卦序をより新しいものとする論文は、張政烺「帛書《六十四卦》跋」《文物》一九八四年第三期（一九八四年三月）、黃沛榮「論馬王堆帛書易經之卦序」《書目季刊》第一八卷第九期（一九八五年三月）、李学勤「馬王堆帛書《周易》的卦序卦位」《中国哲学》第一四輯（一九八八年一月）などがある。

(2) 系統が別のものであるとする論文は、内山俊彦「二『繫辭傳』その他」『中国古代思想史における自然認識』創文社一九八七年一月、饒宗頤「略談馬王堆《易經》写本」『古文文字研究』第七輯、一九八二年六月、劉大鈞「帛《易》初探」『文史哲』一九八五年第四期、一九八五年七月、鄧球柏「帛書周易校釈」(湖南人民出版社一九八七年一月) などがある。

(3) 京房易との関連について述べた論文として、饒宗頤「談馬王堆帛書周易」(『明報』第一九卷第七期、一九八四年七月)、韓仲民「帛易說略」(北京師範大學出版社、一九九二年一〇月) がある。しかし、饒宗頤氏の論文ではその無関係について触れていない。

(4) 『帛書周易』經文の六十四卦卦序については鄧球柏著「帛書周易校釈」(湖南人民出版社、一九八七年一月) による。

(5) 〆表2〱は今井宇三郎『易經』上(新釈漢文体系、明治書院、一九八七年七月) から引用したものである。

(6) 『京氏易傳』卷下(『欽定四庫全書』) では、「陽三陰四、位之正也」について「三者、東方日之出、又丹者徑一而開三也。四者、西方之數、西方日之所入、又方者徑一而取四也」と解している。

(7) 今井宇三郎『易經』上、p.20(新釈漢文体系、明治書院、一九八七年七月)、戸田豊三郎『易經注釈史綱』一、八、附「序卦傳の内容」(p.170-171)(風間書房、一九六八年二月) 参照。

(8) 「今以反對計之、則上經以十八卦成三十卦、下經亦以十八卦

成三十四卦、上經五十二陽爻五十六陰爻、下經五十六陽爻五十二陰爻、共用三十六卦成六十四卦、而卦爻陰陽均平齊整、条理精密」(胡一桂『周易易蒙翼伝』上篇「文王六十四卦反對図」)。

(9) 周立升「帛《易》六十四卦趨議」『文史哲』一九八六年第四期(一九八六年七月)。

(10) 樓宇烈「易卦爻象原始」(『北京大學學報』一九八六年第一期(一九八六年一月)、後に『中國—社會と文化』第2号の中で日本語訳された(馬淵昌也訳。張政娘「帛書《六十四卦》跋」『文物』一九八四年第三期(一九八四年三月))

(11) 『周易集注』(四庫易學叢刊、上海古籍出版社、一九九〇年一月)。

(12) 「上經陽爻八十六、陰爻九十四、陰多于陽者凡八。下經陽爻一百有六、陰爻九十有八。陽多于陰者亦八。上經陰多于陽、下經陽多于陰、皆同八焉。是卦爻之陰陽、均平也」。

(13) 「若以綜卦兩卦、作一卦論之、上經十八卦成三十卦。陽爻五十二陰爻五十六、陰多于陽者、陽多于陰者亦四。上經陰多于陽、下經陽多于陰、皆同四焉。是綜卦之陰陽均平也」(來知德『周易集註』「上下經篇義」)。

(14) 「上下經之篇義、卦爻其精至此。孔子贊其至精至要至神、厥有由矣」(來知德「上下經篇義」『周易集註』)。

(15) 韓仲民「帛易說略」『帛書《周易》卦序』の表に補修を行い、爻數計算を付加して作成した。(北京師範大學出版社、一九九二年一〇月)。

(16) 周立升「帛《易》六十四卦趨議」(『文史哲』一九八六年第

四期、一九八七年七月)、李学勤「馬王堆帛書《周易》的卦序卦位」(《中国哲学》第一四輯、一九八八年一月)、韓仲民『帛易說略』(北京師範大学出版社、一九九二年一〇月)など多くの研究が示している。特に韓仲民の論文では帛書本の卦序は「卦爻辞の内容から離脱した、八卦哲学の思想体系の成立の一つの試みである」と論じている。

(17) 鈴木由次郎『漢易研究』「第二部、第二章、第九節旁通、第十節互体(半象、覆象)」p. 270, 279 (明德出版社、一九六三年三月)。

(18) 韓仲民『帛書說略』(五) 卦序試析 (北京師範大学出版社、一九九二年一〇月) 参照。

(19) 〆表4〃は鈴木由次郎「京房易伝八宮卦飛伏表」(『漢易研究』(明德出版社、一九六三年三月)を参考し、補修を行った。

(20) 「孔子云、易有四、易一世二世為地、易三世四世為人、易五世六世為天、易遊魂帰魂為鬼、易八卦鬼為繫爻、財為制爻、天地為義爻」(『京氏易伝』卷下)。

(筑波大学大学院)